

国際交流は地域、自分を知ること

交流を通じた活動で様々な実り得る

長岡市立表町小学校 篠田賢一教諭（前・ナイロビ日本人学校）

<プロジェクト以前>

下田村立笹岡小学校(新潟県)に勤務している時に、APICNET(国際交流の支援機関)に出会い、日本とニュージーランドの子どもたちが「七夕」をテーマに行った交流プログラムに参加したり、三条市視聴覚ライブラリが中心となった「川と環境プロジェクト」に参加したりしていました。その後、教員になったときから興味があった日本人学校の試験を受け、ケニア・ナイロビの日本人学校に3年間赴任しました。

試験の際、「日本と海外の架け橋をパソコン通信でしたい」と答えたのが試験に受かった理由だと思っています。

実践の経過、教訓

丁寧な国際電話が契機に

ナイロビ日本人学校には、日本の学校から「観光案内」、「海外のデータが欲しい」といったメールが毎日30件ぐらいあり、対応に追われていました。ナイロビ側の情報のみが期待され、ナイロビ日本人学校にとってのメリットは少なく、一方的な気持ちはありましたが、校長先生の方針もあり、丁寧に答えていました。



そんな中、山形の山辺町立鳥海小学校の東海林先生から丁寧な国際電話がありました。メールもファックスも頂き、最も丁寧に誠実さを感じたので交流することにしました。

最初は電子メールでのやりとりでしたが、私の妻の出産で一時帰国していた時に、その情報を知った東海林先生が山形からわざわざ新潟まで来ていただき、話をしたところお互いの学校の刺激になると感じました。もっと深い交流をしたいということになったのです。これが、「そば・ウガリプロジェクト」のはじまりです。山形の特産である「そば」、ケニアの主食である「ウガリ」という、同じ白い粉を送りあい、「どうやって作るのですか」といった具合に交流していったのです。

最初、私は国際理解は、「海外校と行う交流」という甘い考えでしたが、実践をする中で「違うだろう」と思うようになりました。そこで、交流相手にウガリの作り方を伝えるために、それまであまり関わりのなかったメイドさんやタクシードライバーなどと関わる、話を聞くことから国際理解が始まることに気づいたのです。「そば・ウガリプロジェクト」は3年間続き、自分自身の成果として論文にまとめ、財団法人松下視聴覚教育研究財団に応募したところ、理事長賞を頂きました。

帰国後、「そば・ウガリプロジェクト」が2校間のプロジェクトで、全国発芽マッププロジェクトのような多くの学校間で実施したいという思いがあり、長岡市立表町小学校でケニアから持ち帰っていたト

「そば・ウガリプロジェクト」から「POTATO ROAD 2000」へ

山形県山辺町立鳥海小学校とナイロビ日本人学校間の「そば・ウガリプロジェクト」(平成9・10年度)新潟県長岡市立表町小学校を中心とした10数校間の「コーンプロジェクト」(11年度)に続くのが、現在まで続いている「POTATO ROAD 2000」(12年度から)

鳥海小学校を中心とした10種類のイモをきっかけにした遠隔地共同学習。芋の観察から発生する疑問を大切に、地域との連携、他校との交流、情報メディアの活用、国際交流を通して「広げよう 知識と人の輪」をテーマに掲げている。

鳥海小学校、表町小学校、新潟県加茂小学校、ジャカルタ日本人学校の4校の活動紹介のDVDなども作成。また、国内の学校間は、手紙、電話、FAX、電子メール、テレビ会議、ビデオレターなど様々な手段で交流を深めている。

「そば・ウガリプロジェクト」<http://www.yamagata-ced.jp/contentu/syosido/tyoukai.htm>

「POTATO ROAD 2000」<http://www.cec.or.jp/es/E-square/seika/image/bunkakai/G2pdf>

ウモロコシの種1kgを13校に配りました。

交流校は新潟インターネット教育利用研究会（NICE）のメーリングリストで募集しましたが、興味本位のところも多かったようです。また、帰国後1年目だったこともあり、リーダー的に連絡調整するのが難しく、結局は良く知った鳥海小学校とのやりとりが中心になってしまいました。

その後、現在まで続いている、通称・ポテトロード2000と呼んでいる「総合的な学習と情報コミュニケーションの相互作用に関する実践研究」（囲み欄参照）に参加し、総合的な学習の時間の中で実施しています。

自分を表現する、自分を知る

子どもたちは様々な交流学習を通して、「自分自身を表現する」、「自分自身を知る」というスキルを身につけたように思います。

例えば、交流相手校を訪問した際に全校生徒に出迎えられるという体験をした子どもは、次はそれ以上の工夫をして相手に返すようになります。国際交流も結局、最後は「自分自身を表現すること、自分自身を知ることが国際理解ではないか」と考えるに至りました。



ナイロビ日本人学校のスタッフにトウモロコシの育て方を聞く

10年を振り返って

「発表・交流の場」がICT活用の原動力

これまでICTを活用した教育を続けてきたのは、第1は発表の場・交流の場が存在することです。「忙しくて嫌だな」、「やらなければよかった」という気持ちに再三なり、限界を常に感じていますが、サークルの方々は皆さん熱心で、いつもパワーを分けていただいています。第2は長岡市のインフラ環境が整っているため、実践がやりやすいからです。第3は、子どもの変化が実感できるからです。「これは無理かな」と思ってやらせても、きちんとできてしまう子どもがいて、そうした子どもの変化・成長に接することができるのがとても嬉しいのです。

<成功の秘訣>

日頃思っていることを紹介させていただきます。

直接会う

ネットワークが発達したとはいえ、会えるのなら会うことが重要です。電子メールは手軽で低コストですが、直接会うことに勝るものはないと思います。

教師間の情熱の一致

教師の間の情熱が一致していれば、同じ学年同士でなくても、学校規模が違って問題なく交流できます。

メリットの説明

交流のメリットを、保護者・子ども・管理職に対してきちんと説明することが重要です。但し、その前提として自分のクラスのゴールイメージをある程度はつきり持っていないと、他に流されてしまいます。これさえ明確であれば、他者にも説明できます。

自校のテーマ・目標を持つ

交流学習の参加校は、各校それぞれテーマを持つべきです。そのテーマの中で共通項があれば、その部分で交流すればよいと思います。

記録と公開

実践の記録は成果物に残すとよいと思います。私自身は、CDやDVDを学校だけでなく、保護者にも配るようにしています。「コンピュータを買うということか」という保護者もまれにいますが、そういう人には「お子さんと一緒に学校のコンピュータ室で見てください」と言っています。

他の教師への支援

実践の様子を見てもらうだけでなく、サポートすることも重要です。日頃の親密な関係ができると、「授業参観でやりたいけど」と相談が来るようになります。また、逆に時には、わざと聞こえない振りをして、自分たちで解決してくれることを待つこともします。